

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第5章 ソロモンとイスラエル後期のリーダーたちの祈り⑨



ネヘミヤ

悪に対する裁きを求める祈り 目を留めてくださるよう神に求める

悪に対する裁きを求める祈り

ネヘミヤは、アルタシャスタ王から、エルサレムを再建しに行つていいという許可をもらっていました。ところが、他のユダヤ人たちとともに作業を始めると、「国々の民」（エズラ9:1を参照）からの反発に直面して中傷を受けるようになり、ネヘミヤは神のもとに行きます。「お聞きください、私たちの神。私たちは軽蔑されています。彼らのそしりを彼らの頭に返し、彼らが捕囚の地でかすめ奪われるようにしてください。彼らの咎を赦すことなく、彼らの罪を御前からぬぐい去らないでください。彼らは建て直す者たちを侮辱したからです」（ネヘミヤ4:4-5）。

新約聖書の観点からすれば、悪しき人々に裁きが下るように祈り求めることは適切ではないように思われます。私たちの主は「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」（マタイ5:44）と教えてくださったのではないのでしょうか。また、使徒パウロも、「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません。…だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、…愛する人たち。自分で復讐してはいけません」（ローマ12:14,17,19）と教えた際、同じ心情を表していたのではないのでしょうか。ならば、私たちは、旧約聖書にあって神を畏れる人物の唇から発せられた無慈悲で敵意に満ちたこの怒りの言葉を、どのように説明すればいいのでしょうか。

ここで思い起こすべきは、イエスとパウロからの指示は一般的なルールであり、常にそうでなければならないものですが、同時に、例外が許される余地も存在するということです。私たちは、「死に至る罪があります。この罪については、願うようには言いません」（Iヨハネ5:16）という啓示をいただいています。また、あまりに深刻であるがゆえに神が人々を「その心の欲望のままに汚れに」（ローマ1:24）、または、「良くない思い」（ローマ1:28）にお引き渡しになったとされる墮落についても、どう捉えるべきか、考えるヒントをいただいています。さらに、ある人を「サタンに引き渡した」ということについて、「それは彼の肉が減ほされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです」（Iコリント5:5）というパウロの教えもあります。

イスラエルの敵の上に裁きを求めるネヘミヤの祈りは、必ずしも頭に血が上った心から生まれたものではありません。それはむしろ、神と神が目指していることに対する、嫉妬とすら呼べるほどの聖なる熱意によってかき立てられたものであったように思われます。ダビデも同じように祈りました(詩 109:7,14-15 を参照)。クリスチャンであれば決して、相手がいかなる罪人であっても、祈りの対象から意図的に排除すべきではありません。しかし、きわめて稀な場合として、もしも死に至る罪がなされてしまったならば、聖霊がその人の救いについて祈らないようにさせることが、もしかするとあるのかもしれませんが。ネヘミヤは神のみこころに調和する形で祈っていたはずです。なぜなら、悪しき人々が永遠の絶望への一線を越えてしまう時というのは、神のみがご存じだからです。

敵意を持った隣人たちの対立を耐え忍んだユダヤ人たちは、次に飢饉と経済的な危機を経験しました。ネヘミヤが気づいたのは、人々が同胞の役人たちに食いものにされているということでした。役人たちは暴利で金を貸し、返済の滞った家のあらゆる年代、性別の家族たちを奴隷として得ていたのです。そのことを指摘されると、貴族や役人たちはそれまでに得たものを返却すると約束し、二度と高利貸しに手は染めないという誓約をします。ネヘミヤはそれに続いて起こったことを、次のように説明しています。

私はまた、私のすそを振って言った。「この約束を果たさない者を、ひとり残らず、神がこのように、その家とその勤労の実とから振り落としてくださいますように。このように、その者は振り落とされて、むなしいものとなりますように。」すると全集団は、「アーメン」と言って、主をほめたたえた。こうして、民はこの約束を実行した。(ネヘミヤ記5:13)

一見したところ、この節は、祈りというよりはむしろ、厳粛な呪いの宣言であるように見えます。しかしよく見ると、ネヘミヤは、主に対するこの約束を守れない者には、誰であれ裁きが行われるようにと神に期待していることがわかります。ネヘミヤは、自分には人々に約束を守らせることができないということをはっきりと認識していました。しかし、神にはそのことが豊かにおできになることを知っており、そうなるようにと祈っているのです。

目を留めてくださるよう神に求める

時には、著しい不従順とともに、忠実な奉仕もまた、神に気づいていただけていないかのように思うことがあるかもしれません。ネヘミヤは、敵たちの悪しき行いもさることながら、自らの忠実さについても、神はもしかすると適切な形で気づいてくださってはいないのかもしれないと感じていました。彼のこの不満は、二つの節に記録されています。

私の神。どうか私がこの民のためにしたすべてのことを覚えて、私をいつくしんでください。(ネヘミヤ記5:19)

この最初の願いは、自分が熱心に働いてきた対象の人々があまり感謝してくれていないようだという彼の感情を反映しているように見えます(このような感覚は、今日においてもよくあることです)。たとえそうであっても、感謝を知らない人々とは違う、神なのだから、しかるべき時に報いてくださいますようにという単純な

祈りを捧げることで、ネヘミヤは自らの痛みを和らげているのです。

第二の願いは、それとは正反対のものです。ここでは、ネヘミヤ自身が扱わなければならない、悪を行う者たちに対し、神にしかるべき報いを求めるものとなっています。

わが神よ。トビヤやサヌバラテのあのしわざと、また、私を恐れさせようとした女預言者ノアデヤや、その他の預言者たちのしわざを忘れないでください。(ネヘミヤ記6:14)

当時、政治的リーダーたちや巡回預言者たちが、神の働きを妨げていました。これは、私たちにとって、なんと価値ある教訓でしょうか。人間であれ、悪魔であれ、私たちが貶めようとする者たちについて、神が「忘れない」でいてくださるよう、また、事を起こしてくださるよう、切にお願いすべきだというのです。されたことには報復をするというのが私たちの傾向ではありますが、それはすべきではありません(ローマ12:19を参照)。報復の権利なるものは、神が手放すことなくお持ちなのであり、ひとたびなされるならば、正当な形でなされるのです(レピ19:18、申命32:35、詩篇94:1を参照)。

? 質問

- 1 イスラエルの敵の上に裁きを求めるネヘミヤの祈りは、どこから生まれてきていると思われますか？
彼の祈りは何に調和するものだったと思われますか？
- 2 ネヘミヤは、自分には人々に約束を守らせることができないと認めるとき、どのように祈りましたか？
あなたは、自分の力で誰かに約束を守らせることが難しいと思うとき、どう祈ったらよいと思いますか？
- 3 ネヘミヤは人々のために熱心に働きました。でも、人々も神もそのことに気づいていないように感じたとき、彼はどう祈りましたか？ネヘミヤの祈りは適切で必要なことだったと思いますか？
あなたにも同じような祈りが必要だと思いますか？
- 4 悪を行なう政治的リーダーたちや巡回伝道者たちに関してネヘミヤが祈った内容は、どのような点で模範にできますか？
彼の祈りは神に対するどんな信仰を背景としていますか？
あなたもネヘミヤのように祈る必要があると思いますか？
- 5 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？
どんなことを実践したいと思いますか？



祈り

天の父なる神さま。ネヘミヤのように、私も悪に取り囲まれることがあります。それでも、自分で報復するのではなく、あなたにおゆだねできますように。自分の奉仕が報われていないと感じるときも、あなたは覚えて下さっていると信じることができますように。